

## 学校と博物館の連携で生まれる学び

小田原市立早川小学校 山田 恵里

地域には、まだ私たちが気づいていない“学びの宝物”がたくさん眠っています。それを見つけ出し、子どもたちの学びにつなげられることが、学校と博物館の連携だと今回の経験を通して感じました。

このたび、地元の郷土資料館が企画した「学校に眠るお宝展」に、早川小学校の窓口として関わらせていただきました。郷土資料館では、市内の小学校に残っている縄文・弥生時代の遺物を調査し、それらを集めて一つの企画展として展示するという取り組みを行いました。学校と博物館が協働して地域の文化を掘り起こす、意欲的な試みでした。

最初に「学校に古いものがありますか」と問い合わせを受けたとき、正直なところ、なぜ急にそんなことを聞かれるのか分かりませんでした。まず、「ガラスケースの中にあるのが確か縄文土器だったような…」と、この程度の認識です。資料室でほこりをかぶった破片たちが土器であることなど、考えたこともありませんでした。

ある日、学芸員の方が学校を訪れ、ガラスケース内の土器を見て「すごいですね」と褒めてくださいました。資料室の破片を一つ一つ確認しながら「かわいい」と言われました。そのときは「何を言っているのだ!？」と、とても驚きましたが、後日、私自身が企画展の関連イベント「縄文土器を拾って歩く」というイベントに参加して、その言葉の意味が分かりました。畑の土の中から、自分の手でかけらを見つけた瞬間、「あっ、これが土器の破片なんだ」と胸がキュンとしました。たった一片でも、そこに人の手のぬくもりや時の流れを感じるのです。あの「かわいい」という言葉には、土器への愛着と敬意が込められていたのだと、今は分かります。

学校に残っていた破片たちは、その後、郷土資料館に集められ、企画展「学校に眠るお宝展」で美しく展示されました。会場を訪れてみると、濃い藍色の絨毯の上に土器のかけらが整然と並べられ、まさに“お宝”に変身していました。展示が

終わると、それらはその展示された様子そのままです。丁寧に学校へ返却され、もとの場所に戻ってきました。その心づかいにとても感謝しています。展示されたものは同じでも、その見え方や感じ方は、博物館の手にかかるとこんなにも変わるのかと感動しました。

今回の取り組みを通して、学校と博物館が互いに補い合う関係の大切さを実感しました。学校では子どもたちに地域の歴史を実感させたいと思ひ、博物館では地域の文化を次の世代へ伝えたいと考えています。方向は同じなのに、日常の忙しさや仕組みの違いから、なかなか思いが通じにくいのが現実です。でも、一度でも連携の実例ができると、それが翌年度にも自然に引き継がれていくことが多いと感じます。つまり、大切なのは「最初の一回目をどう実現するか」なのです。

今回、学芸員の方々と関わる中で、「学芸員さん」ではなく名前で「〇〇さん」と呼び合える関係ができました。「ねえ、こんなことしてみたいんだけど」「他の学校では今こんなことしていませんか?」と、気軽に声をかけ合えるようになったのです。こうした関係ができたことで、連携がぐっと身近なものになりました。

博物館の方から、「同じ授業を同じ時期にいくつかの学校でできると、準備が楽になる」と聞きました。もし、ある学校で授業が実施されたときに「あなたの学校もどうですか?」と知らせてくれるようなシステムがあれば、多くの学校がきっと喜んで参加するだろうと思います。

今回の経験を通して、学校と博物館の連携は、特別な行事ではなく、日常の学びの一部として続けていけるものだと感じました。地域の歴史や文化に触れながら、子どもたちが「自分たちのまち」を誇りに思うようになること。それこそが、博物館と学校がともにめざす姿なのだと思います。今後も、今回生まれたつながりを大切にしながら、学校と博物館が互いに学び合い、支え合う関係を広げていきたいです。